思い起こせば……（ある風景その2）

巣立ち（パートⅠ）

某月某日。――ハルピンを過ぎてからは文字どおり一望千里。終日平たんとも言える程のゆるやかな起伏の草原を，只ひたすらに汽車は走る。車窓に見る北満の平野は，緑の中に赤，白，黄，紫をちりばめて，まさに百花りょう乱である。

目的地北安着。馬車に乗ろうとして，馬車夫に交渉したが言葉が通じない。文字の国と思って，「省公署＝(県庁)」と書いて見せたが，何と字が読めない。やり合っているうちに人の山。どうこうするうちに，学者が居たとみえて，車夫もニコニコ。

1キロ近く走って，省公署の玄関前に降り立ったとき，大きな大きな太陽が，空も大地も，空気も水も，ラバの啼き声も，何もかも真赤に染めていた。

巣立ち（パートⅡ）

受付に採用通知書を出すと，給仕風の少年が何やらペラペラ。そして，同室の他の者にこれが渡ると，50歳がらみのその人は，不思議さ，好奇心，懐しさ，そんなものが入りまじった目で，まじまじと見つめながら，立派な日本語，それも東北弁で話しかけたのにはジーンときた。

「日本人であった。」

いろいろあって，さて，宿屋はと聞くと，街に満人旅館が1軒あると教えてくれたが，もう行く気にもなれない。ここに泊めてくれといったら，このご仁，役所だがらと断わる。それなら前の草原にと思って，風呂敷や紙を広げ出すと，さすがに「中に入れ。……」。かくて受付のテーブルの上で一夜を明かす。

家を出てから5日目，17歳のときの一コマである。

三途の川

某月某日。風呂の用意がととのったと告げる団員の声に，団長がしきりに入浴をすすめる。早速ご馳走になることとした。実は，開拓庁が歳末に開拓団の先遣隊慰問を計画，関係外の各課にも協力依頼があり，出向いてきていたのである。

案内された風呂場に来て驚いた。アンペラや南京袋等々で周囲をかこんではあるが，屋根はなく，浴槽の外側は10センチ程の氷。無理もない。－30度をこえる季節である。

頭上に輝く北極星を見ながらの風呂もよかったが，その夜の宴はまた格別。彼等も準備が出来次第呼び寄せる筈の妻子を思い，はるか故郷をしのんで話に花を咲かせた。

いろいろあって，さて翌朝はノロ(満州鹿)狩りである。日の出の時刻がよいとかで，団長が起すままに防寒具に身をかため，トラックで夜の明ける前に出発。手にするは三八式歩兵銃である。

1時間程行ったところに，一面枯すすきで覆われた小高い丘が寝そべっていた。団長の指示で，30人が5メートル程の間隔で上下一列に並び，斜面を丘ぞいにおす。

と，ノロが2頭飛び出し，われわれとは反対の後方に走る。ピンと立てられた白い尻尾を目当に一斉に射ちはじめる。するとノロはわれわれの左方を大きく迂回して，前方にぬけようとしはじめた。

数歩走っては大きく（10メートル程）空中を飛躍するあの姿は実に美しい。

そのときである。防寒帽のテッペンを強く何かがはじいたような感じがしたのは。思わず帽子を脱いでみると，中央にある筈の丸い1センチ程の玉がない。一瞬背すじに冷たいものが走った。

その日，収獲はゼロ。　（黒沢）

不定期版 センチメンタル・ジャーニー…その2

古河市（7月1日現在　人口56,259人，15,494世帯）

夏に眼がさめるのはいつも早朝，首をそらして障子をみれば，雨戸のふし穴からの光が廊下をこえて外の景色を逆様に写し出している。それでも寝床から起きだすのは6時頃で，この頃になると自転車に納豆をつんだ納豆屋さんが美声をはりあげて通っていく。この納豆屋さんは自分の声を聞かせるのが第一，商売は二の次なので，あっという間に通りすぎてしまう。買いたい時には，声が聞こえたと思ったらお金を持って駆けだし，通りで来るのを待っていなければならない。いくら怒鳴っても，めったなことでは後戻りはしてくれないのである。

古河市に引越してきて小学校に入学したが，何といっても楽しみなのは夏休み。その中で唯一の苦しみは，もちろん夏休みの宿題という奴である。朝の涼しい時に終らせろと，いくら親に言われても，もううわの空，心ははやり胸おどり，落ちついて坐っているどころではない毎日が続くのだから，やはり宿題は子供心をむしばむ悪習なのである。

当時住んでいた家の裏手は墓地になっており，トタン塀の上から墓石が顔をのぞかせていた。この墓地は面白いところで，尊勝院と宝輪寺という2つのお寺の墓地がくっついているのである。従ってその面積はかなり広かった。ここに引越してきてすぐの頃，墓地の中で迷子になったくらいである。その2つのお寺の中間には小さなお稲荷様があったりして，何が何やらわからない。

このあたりは鍛冶町といっており，小学校は古河市立第二小学校であった。この学校の校庭がこれまた広く，約1,800人いた児童が一堂に集まって朝会を開いても，まだまだ余裕があったくらいである。今は体育館だ何だのと建物ばかり増え，狭くなってしまったらしい。

学校への通学路の途中には，いつもガラガラに空いているビリヤード場が1軒あり，そこを右に曲れば生糸をとるために繭を煮る工場があった。その工場のわきをかなり大きい排水路がとおっており，それに沿って学校の前まで道路が続いている。繭を煮るのはかなり臭うもので，馴れるのには時間がかかった。

そのあたりは七軒町といい，工場の2・3軒となりには同じクラスの女の子の家があった。お茶屋さんを営んでいて，店の中には古い六角形の柱時計が重い音を立てて動いていた。

鍛冶町も七軒町も今はない。町名変更で，それぞれ本町一丁目，本町二丁目になってしまっている。

この頃から私の映画狂いが始まった。土曜，日曜には毎週のように映画を見に行った。古河市内には映画館が5軒あった。三国劇場，古河映劇，第一光映，第二光映，それともう一軒松竹系の映画館であった。どういう訳か前述の4軒の映画館は2軒ずつ隣接していた。当時，小学生の入場料は1人70円。子供が1人で映画を見に行ってはいけないなどという規則は全然なかった。

ウォルト・ディズニーの一連の記録映画，マンガ映画を始め，日活の小林旭シリーズ，東宝のゴジラなど怪獣シリーズ，東映の時代劇，現代劇，洋画など手当り次第に見たものだが，特に印象が深かったのは，「砂漠は生きている」「老人と海」，「禁断の惑星」「縮みゆく人間」「恐怖の報酬」「米」などである。

昭和34年は，正月1日に初雪が降った。この年，小学5年生に進級する直前だった春休みに古河市を引越した。丸4年間住んだことになる。　（伊藤）

当時の庭 ― 大きな無花果（いちじく）の木がある